連載

# 中大生の旅するチカラ

観光ジャーナリスト
千葉 千枝子

## 2020年東京五輪開催に期待

# 自身を磨いて五輪を大舞台に

2020年、夏季五輪の開催都市に東京が決定した瞬間、喜びを爆発させたのは皆さんも一緒だろう。私ごとではあるが、昭和の東京五輪（1964年）の年に両親が結婚して、その翌年に生まれた元祖五輪ベイビーだ。招致決定の直後から、なぜかお祝いのメールが知人らから寄せられた。スポーツツーリズムという言葉の通り、五輪と観光は密接な関係にあるからだろう。

日本で初めて観光にまつわる法律「観光基本法」ができたのは、1963年のことである。その前年に首都高速の一部区間が開通、五輪開催年には日本初の新幹線・東海道新幹線が開通した。ホテルニューオータニもオープンして、ホテル御三家（ほか帝国ホテル、ホテルオークラ）がそろい踏みした。さらに、それまで公用でしか認められなかった渡航が自由化されて、誰もが海外へ旅ができる時代を迎える。1965年には、日本初のパッケージツアー商品「ジャルパック」が誕生、私と同い年である。

五輪から6年後の1970年、大阪万国博覧会が開幕して、爆発的な国内旅行ブームが訪れた。同年、ジャンボジェット機が登場、陸空ともに大量輸送時代を迎える。やがて1ドル360円の固定相場制から、変動相場制へと移行（1971年）したことで、渡航者は右肩上がりで増え続けた。

このように五輪開催を契機に、日本は戦後の復興から高度経済成長期を迎え、それまで暮らしのなかに見出すことがなかった旅やレジャーが中流家庭にも流れ込んだ。モータリゼーションの波が訪れ、「昭和の大旅行時代」が到来したのである。

70年代、一億総中流社会といわれ「昭和の大旅行時代」が到来した（1971年当時の筆者）

多感な子供時代を、そうした環境のなかで過ごした。こんなエピソードがある。岩手出身の私の父が、初めて海外出張に渡米した1974年、田舎の母親が心配して、近所のお社に渡航安全祈願のお百度参りをしたという。大仰と思うかもしれないが、当時は1ドル280円あたりを標榜していたから、社用でもなければ庶民はなかなか行きづらい。空の安全も、未知のものだった。誰もが洋酒や香水、万年筆などの舶来土産を抱えて、凱旋帰国したころだ。そんな父の姿が、記憶も鮮明に蘇る。とにかくあのころは、モノ（ハード）の時代だった。

今、私たちは成熟のただなかにある。五輪招致のプレゼンテーションで、さかんに叫ばれたレガシィ（遺産、受け継いだもの）という言葉を、ぜひ今の若い世代の人たちに、鋭く感じてもらいたい。二度目の夏季五輪開催地として、アジア唯一で選ばれたことを誇りに思うと同時に、先人が築いた日本を確かなものとして次の世代へ繋いでほしい。

五輪は、東京という、ただ一都市の祭ごとではない。聖火ランナーは日本全国、東日本大震災で甚大な被害をうけた各地をも駆け巡り、絆を繋ぐであろう。あの震災からの復興を世界に示して礼を尽くす、絶好のチャンスをいただいた。

2020年は、すぐそこにある。今の私たちに求められているのは、モノよりコト、ソフト面での充実なのではなかろうか。安全で清潔な国であり、さらなるインフラ整備で便利さも増すだろう。グローバルシティとしての準備が、この先、加速する。しかしソフト面での充実は、一朝一夕には得られない。おもてなしの心や、きめ細かなサービス、感動体験といった“日本らしさ”で諸外国の人たちを魅了するのは、まぎれもなく人である。

近年では自治体職員にも、世界に通用するグローバル人材が求められている。今回の五輪招致に尽力したスポーツ振興局（東京都）をはじめ自治体には、文化観光スポーツ部（沖縄県等）といった専門部署が設けられるようになった。スポーツと観光には親和性があるから、観光人材の育成も急務である。

学生の皆さんには、今こそ自分への投資で磨きをかけ、2020年東京五輪を自身の大舞台としてほしい。

五輪会場へのアクセスに水上バスの活躍も期待
（隅田川を運航する東京水辺ラインから望む東京スカイツリー）

**略歴**　ちば・ちえこ　観光ジャーナリスト。横浜商科大学講師。中央大学経済学部卒。著書に「観光ビジネスの新潮流」（学芸出版社）など多数。